



Osaka Gakuin University Repository

Title	フランス語小話 ―ジュネーヴ在勤時代のフランス語 学習奮闘記― Some Episodes on a Struggle to Learn the French Language
Author(s)	多賀 敏行 (Toshiyuki Taga)
Citation	大阪学院大学 外国語論集 (OSAKA GAKUIN UNIVERSITY FOREIGN LINGUISTIC AND LITERARY STUDIES), 第 76 号 : 23-38
Issue Date	2018.12.31
Resource Type	Research Note/ 研究ノート
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

フランス語小話 —ジュネーヴ在勤時代のフランス語学習奮闘記—¹

多 賀 敏 行

1. はじめに

フランス語に対しては以前よりコンプレックスを抱いていた。大学時代に第2外国語として2年間勉強したが、ものにならず、悔しくて、外務省に入省後、英国に留学した時も、夏休みには南仏の大学の外国人向け夏期講座に出席し、フランス語を勉強した。航空運賃、授業料、生活費、さらに地元レストランでの食事代などを合わせたら、200万円位は確実に使っている。にもかかわらず覚えた単語の数は200語くらい、1単語あたり1万円もかかっていることになり、恥ずかしくてとても他人に大きな声で言える話ではない。いずれにせよ、私のフランス語はとうとう開花しなかった。

その後、2001年に在ジュネーヴ国際機関日本政府代表部公使に就任した私は、ジュネーヴというフランス語圏の土地に勤務できたことを奇貨として、この昔の投資の果実を回収しようと思い立ち、猛勉強を開始した。ところが、進歩は遅々たるもので悪戦苦闘の連続だった。何と言っても、最初に勉強した外国語が英語であるので、フランス語を勉強していてもこの英語の呪縛から解き放たれるのは容易ではない。同じラテン語の単語を共通の起源としている表現であっても、現代英語と現代フランス語においては、大きく意味が異なったり、基本の意味は同じでも微妙に語感が異なっていたりすることがあり、なまじ英語を多少なりとも身に着けているが故に、英語表現からフランス語表現の意味を類推してしまい、落とし穴に陥ることがあった。本稿では、そのような英語とフランス語の意味の食い違いをしみじみ感じたエピソードをいくつか

紹介するとともに、ジュネーヴ在勤時代に取り組んだフランス語学習を通して、学生時代から疑問に思っていたフランス語に関する事柄との再会や、より深く掘り下げて考察することで理解を深めることができた事柄等を、ジュネーヴでの経験と絡めながら述べる。

2. シャモニーでの登山のパンフレット：affluence

ジュネーヴに住むようになって、モンブラン（4,810.4m）に早く行っておこうと思った。日本人観光客が年間8万人もモンブランの麓の町シャモニーを訪れる。そんななかで、ジュネーヴに住んでいるのにモンブランに行っていないとなれば、ある種の後ろめたさを感じたりする。そこである日思い切ってシャモニーに出かけた。モンブランの頂上へは本格的な準備がないと登れないが、直ぐ手前のエギュー・ド・ミディ（3,842m）という山にはシャモニーからロープウェイで登れるということを知った。早速切符を買ってロープウェイに乗り込み、途中で1回乗り換え、エギュー・ド・ミディの頂上のある駅まで行った。すばらしい眺めで感動したが、空気が薄いせいか、そして若くなくなったせいか、駅に着いてそれに繋がる山小屋の中の階段を20段ほど上り下りしただけなのにぐったりと疲れてしまった。

さて、話は本論に入る。このエギュー・ド・ミディのロープウェイのパンフレットを読んでいたら、エギュー・ド・ミディへ登り、頂上にある展望台などを訪れ、その後麓に降りてくるという行程の所要時間は「2時間」と紹介してある。そしてそれに注が付いていて、affluenceの場合（en cas d'affluence）は「3時間から4時間」と書いてあった。

affluence という単語を見て、英語にも全く同じ単語があると思った。その形容詞形は affluent である。大学に入学した頃のことを思い出した。もう50年も前のことである。その頃、経済学と言えばポール・サミュエルソン教授の『経済学』（*Economics: An Introductory Analysis*）という電話帳のように厚い本（しかも上・下2巻）が教科書であった。それと並んで何冊かの副読本が

あったが、その1つにジョン・ガルブレイス教授の筆になる *The Affluent Society* という本があった。大量消費時代の到来を告げる画期的な本で『ゆたかな社会』という題で日本語訳が出版されていた。この本の影響を少しでも受けた者にとって、**affluent** という言葉に出会おうと「豊かな」という意味がまず思い浮かぶのである。これから連想すると、パンフレットにある「**affluence** の場合」とは「豊かな場合」ということになる。しかしそれでは意味が通らない。あきらめて **affluence** を仏和辞典で引いてみると、以下のように書かれていた。

affluence 女 雑踏、混雑

heures d'affluence ラッシュ・アワー、

affluence des spectateurs ごったがえす観客

フランス語で **affluence** とは専ら「人がいっぱいやって来て混雑すること」を意味するのだ。社会の「豊かさ」とはどうやら関係がないらしい。つまり、パンフレットは「人がいっぱい押し寄せる時間帯や時期には、エギーユ・ド・ミディの頂上へロープウェイで往復するには3時間から4時間はみた方が良い」と言っていたのである。

英語の **affluence** もフランス語の **affluence** もラテン語の **affluere**（一気に流れる）から由来するが、英語では物全般、もしくは財や富の大量流入を連想させるのに対して、フランス語では人々の集中を意味するというように、それぞれ意味の特化が起きて、このように意味が離れてしまったようである。

3. 9.11テロ事件の報道をめぐる：avertissement、enquête、prétendre

私のジュネーヴ在勤中の2001年9月11日、アメリカで同時多発テロ事件が起きた。当然のことながら、ヨーロッパでも連日その大事件のニュースが、新聞やテレビで報道されていた。ある日、寝転んでフランスのテレビ局のニュー

スを見ていたら、アナウンサーが「ブッシュ大統領がアフガニスタンのタリバン政権にウサマ・ビン・ラディン氏の身柄を引き渡すよう要求し、引き渡さない場合には報復を行うとのアヴェルティスマン (avertissement) を与えた」と言っていた。avertissement と聞いて英語の advertisement を思い出し、「宣伝」の意味を思い浮かべたが、直ぐに「報復を行う」ということが「宣伝」の中身とはいかにも変だと気が付いた。辞書を調べてみて avertissement とは「警告」の意味であると知り、合点がいった。

英語の advertise は、15世紀初めの古フランス語 advertir (大衆に(注意を)向けさせる) に由来する。古フランス語の advertir はラテン語の advertere (注意を払う) から来ており、その後、d が落ちて avertir (知らせる、警告する) となった。英語で「宣伝する」という意味で用いるようになったのは18世紀に入ってからのものである。

10月2日の『ル・モンド』(*Le Monde*) 紙の第1面の最初の記事の見出しに「テロ攻撃：アンケートはヨーロッパに集中」と書いてあった。「アンケートがヨーロッパに集中する」とはいったいどういう意味なのだろうかと思った。そもそもこんな時期にアンケートとはちょっと悠長過ぎるのではないか。ヨーロッパの各国の市民にいったい何をアンケートしようというのだろう。狐に摘ままれた気持ちで本文を読んでみた。「FBI は、ヨーロッパが9月11日のテロ攻撃の準備の中心地であったと判断している」とあった。これを読んで「あっ」と思った。最初に出てきたアンケート (enquête) とは、事件の「捜査」のことだったのだ。つまり見出しは「テロ攻撃：その(犯人たちの足取りについての) 捜査はヨーロッパに集中する」と解釈すべきだったと悟った。辞書を調べると、enquête とは日本語でいうアンケートの意味でも使われるが、多くの場合はこのように「犯罪捜査」の意味で使われるようだ。元々ラテン語の inquirere (尋ねる) に由来する語である。英語には古フランス語経由で14世紀頃入ってきて、inquire として現在も用いられているが、アンケートの意味ではフランス語起源の questionnaire が用いられている。

ウサマ・ビン・ラディンの兄の妻、つまり義理の姉がジュネーヴに住んでいて、その女性が地元紙の『トリビュンヌ・ドゥ・ジュネーヴ』(*Tribune de Genève*) のインタビューに応じた。その記事の見出しには「ウサマ・ビン・ラディンの義理の姉 (la belle-sœur) が初めて心の内を明かす」と書いてあった。その記事によるとウサマ・ビン・ラディンには何と53人の兄弟姉妹がおり(兄弟が23人、姉妹が30人)、このインタビューに応じた女性のご主人(別居中)がこの兄弟の一人で今年になってスイス国籍を取得しているとのこと、そしてウサマ・ビン・ラディンとはかねてより縁を切っているとのことである。この記事によれば、この女性がインタビューに応じた最大の理由は大学生の長女がニューヨークに留学していたが、アメリカの新聞に「9月11日にはニューヨークのアパートから謎のように消えていた」と書かれたので、それが事実と違うことをはっきりと述べたいという気持ちに駆られたからだとのことである。彼女は「娘は昨年コロンビア大学で法学修士号を取得した後、研修コースを取るために引き続きニューヨークのアパートに住んでいた。そして娘がニューヨークに住んでいたのはこのように正当な理由があり、滞在は合法的なものだった。今年の夏は家族と一緒に過ごすためにジュネーヴにやって来ていた。ジュネーヴに住んでいるうちに9月11日を迎え、例のテロ事件が起きた」、「したがってアメリカのいくつかの新聞が『娘が(9月11日のテロ攻撃をあたかも察知しそれを避けるように)謎のように消えてしまった』と *prétendre* しているが、これは全く事実ではない。」と述べている。

さて、ここで問題は *prétendre* という単語の意味である。英語の *pretend* は「～の振りを装う」という意味であるが、これを前述の文に当てはめると意味が通らない。どうしてだろう。おそらくフランス語では別の意味で使われているのだろうと勘を働かせてみる。そして辞書を引いてみる。正解である。フランス語の *prétendre* は「強く主張する」という意味であると出ている。この *prétendre* の意味を正しく押さえないと、前述の文の意味は全く把握できないことになる。なまじ語源を共有し、したがって綴りも殆ど同じである

単語が英語にあるために、その英語の呪縛にとらわれ、足をすくわれかねない、実に危ない単語と言えよう。**prétendre** はラテン語の **praetendere** (主張する) に由来する。そして、古フランス語の **prétendre** が英語に入ったとされる。15世紀には英語において「～の振りを装う」という意味で用いられ始めたということで、この単語に関しては、フランス語のほうが元のラテン語の意味を保っていると言えよう。

ところで、「義理の姉(妹)」は **belle-sœur** というが、その女性が実際に身体的に美しくない場合でもそう言うのだろうかという、受け取りようによっては女性差別主義的発言と糾弾されかねない危険な質問ではあるが、言語学的社会学的には根源的とも言える疑問を、職場のフランス人に聞いてみたら答えはイエス(というか **Oui**) だった。自分たちの家族の一員になろうと嫁いで来る人なのだから、きっと気持ちの優しい、心の美しい人に違いないと推察される。その推察から、つまり心の面に着目して、**belle** (美しい) という表現が使われるようになったとのことである。この説明はそれなりに説得力があると思われるが、如何であろうか。

4. ある有名歌手の2年ぶりのステージ : **anniversaire**, **public**, **interpréter**

フランス語の **anniversaire** は英語の **anniversary** と似ているので意味も同じと思いがちである。ところが、実際には微妙なずれがあるので要注意である。少し詳しく見てみたい。まず、英語の **anniversary** とは(毎年)の記念日のことを指す。例えば、**a wedding anniversary** は「結婚記念日」であり、**celebrate the 200th anniversary of American Independence** は「アメリカ独立200周年記念日を祝う」という意味である。一方、フランス語の **anniversaire** の意味は先ず第一に「誕生日」のことを指すのである。**anniversaire** が修飾語なしに出てくる時は「誕生日」の意味と思って間違いない。英語の **anniversary** と同じように、毎年(の)記念日という意味でも用いられるが、この場合は裸で **anniversaire** が出てくるわけではなく、これを修飾する言葉が前か後ろに必

ず付くので間違えることはない。例えば *le vingt-cinquième anniversaire de notre mariage* 「我々の結婚25周年記念日」、*les deux centième anniversaire de la Révolution française* 「フランス革命200周年」という風に使われる。

私はフランス語の *public* という単語は当然英語の *public* と同じ意味と思い込み、何も疑念を抱くことはなかった。ところがフランス語の *public* が英語のそれとはほんの少し意味がずれて使われるケースがあることに気が付いた。私の好きなシャルル・アズナヴール (Charles Aznavour : フランスのシンガーソングライター) の CD の中に “*Je m’voyais déjà*” (「私は既に成功する自分の姿を思い浮かべていた」という意味) というタイトルの楽曲がある。この曲はなかなか軽快なリズムで、フランス語の詩も良く出来ていて、そして何と言っても聴いていて耳に心地よい。その歌詞の内容はアズナヴールの自伝的内容とも言うべきもので、「自分は18歳の時故郷を後にして、パリに向かった。心は軽く、パリで成功を収める自信に満ちていた」という言葉で始まる。ところがいろいろ芸能活動を試みたが、泣かず飛ばずでパッとしなかったという趣旨の言葉が続き、このようなフレーズが出て来る。

私は陰から抜け出そうとしてあらゆることをやってみた。愛の歌を歌ったり、コミックやファンタジーの歌も歌った。でも全て上手く行かず、依然陰の中に留まった。でも悪いのは私ではなく、何も理解しようとしなくて *public* こそが悪いのだ (*Ce n’est pas ma faute mais celle du public qui n’a rien compris*)。

public とは「公衆、大衆」の意味と考えてみたが、少しその指示対象を絞り切れていないような気がした。*public* を仏和辞典で調べてみたら、第1番目に「公衆、大衆、一般の人々」という意味が書かれていたが、第2番目に「聴衆、観客、視聴者、読者」という意味が出ていた。そして例文として次の文が出ていた。

Le public applaudit le jeune pianiste.

(聴衆はその若いピアニストに拍手を送る。)

Il a son public.

(彼には読者(聴衆)がついている。)

アズナヴールの歌に出てくる **public** の意味はまさに「聴衆」であったのだ。つまり、「悪いのは自分ではなく、何も理解しない聴衆が悪いのだ」という意味になるのである。フランス語は、ラテン語をルーツとして、現代に至るまで長い歴史を経てきた言語である。そのなかで単語の意味が細分化し、その結果、意味の特殊化、語の多義化が起こっていると考えられる。

フランス語の **interpréter** は英語の **interpret** からの連想で「(外国語を) 通訳する」あるいは「(～の意味に) 解釈する」という意味だと推察したくなるが、そうすると間違えることになるので要注意である。『トリビュヌ・ドゥ・ジュネーヴ』(3月11日付)の映画欄でドミニク・サンダ (Dominique Sanda) という女優を紹介する記事を見かけた。ドミニク・サンダとは、私が40年程前フランスに少しの間暮らしていた頃既に有名になっていた女優で、少々もの悲しい感じのする美しい女優で、私はその映画をよく見たものである。『トリビュヌ・ドゥ・ジュネーヴ』のその紹介記事にこのような文があった。

1976年に彼女は le Prix d'interprétation à Cannes を受賞して、その結果、現代の映画界で不動の地位を確立した。

さて、le Prix d'interprétation à Cannes とは何だろう。「カンヌ映画祭通訳賞」、あるいは「カンヌ映画祭解釈賞」ではなく、実は「カンヌ映画祭主演(女優)賞」のことである。フランス語の **interpréter** には確かに「解釈する」という意味もあるが、第2番目に「演じる、演奏する」という意味があるからである。一方、英語の辞書で **interpret** を引くと、第1番目に「解釈する」、第2番目に「通訳する」とあり、やっと第3番目に「(自己の感覚・解釈で)

～を演ずる、演奏（演出）する、表現する」と出てくる。しかし、「自己の感覚・解釈で」という但し書きが示すように、あくまで「役や曲や作品全体を自己の中で解釈し、昇華すること」がベースとなった役作りや演奏を指すようである。

さて本節ではここまで、フランス語の *anniversaire*、*public*、*interprétation* の意味を見てきたが、それらを理解すると次の仏文がよく分かるようになる。セリーヌ・ディオン（Céline Dion）という歌手をご存じの方は多いと思う。彼女はフランス系カナダ人で7オクターブの音域を持つという。おそらく現在、世界中で最も上手な歌手のひとりではないかと思われる。特に、映画 *The Titanic* のテーマ曲 “My Heart Will Go On” は1997年アカデミー歌曲賞を受賞し、グラミー賞でも最優秀レコード賞など多数の賞を獲得した。ところが、その人気絶頂期の1999年、彼女は自身の出産とガンを患っていた夫の看病のために歌手活動を休止するのである。そして、2年余りの月日が流れ、その天才歌手が2002年3月にステージに復帰したのである。3月30日 FT1テレビでその様子が放映されたが、そのテレビ番組の紹介記事の一部を以下に紹介する。

Après deux ans d'absence, la chanteuse d'origine canadienne retrouve son public le même jour de son anniversaire. Pour l'occasion elle interprète de nombreux duo avec des stars de la chanson.

（下線は筆者）

この仏文の意味は、「2年の休みの後、このカナダ出身の歌手はちょうど自分の誕生日でもあるこの日にファンたちに再会する。この機会に彼女はシャンソン界のスターたちと数多くのデュエット曲を歌う。」となる。尚、この歌手は、18歳の時にスイスのローザンヌ近くのモルジュに住んでいて、その資格でもってスイス代表としてユーロヴィジョン・ソング・コンテストに参加し、優勝したということである。そういう意味でスイス（仏語圏）とは浅からぬ関

係があるようだ。

5. Bonjour と Bonne journée

郊外のホテルに長期滞在していた時のことである。朝ホテルを出ようとして部屋の鍵をフロントで従業員に渡そうとする。目が合って従業員が私に *Bonjour!* と言う。こちらも *Bonjour!* と答える。鍵を受け取った後、従業員は私に *Bonne journée!* と言う。私は *Merci.* と答えて出口に向かう。こんなやり取りを毎朝繰り返した。

夕方もほぼ同じことである。ホテルの入口から中に入り、フロントに行く。従業員と私がほぼ同時に *Bonsoir!* と言う。私が *Ma clef, s'il vous plait.* (私の鍵をください) と言う。従業員は私の鍵を見つけて私に鍵を渡してくれる。その時、彼は *Bonne soirée.* と言う。私は受け取りながら *Merci.* と答える。

人と会った時、朝であれば *Bonjour.* (夜であれば *Bonsoir.*) と言う。そのように挨拶し合った2人が数秒後に別れる時に、今度は *Bonne journée.* (*Bonne soirée.*) と言うのである。わずかな数秒の違いで挨拶の言葉が *Bonjour.* から *Bonne journée.* に (*Bonsoir.* から *Bonne soirée.* に) 変わるのである。

Bonjour (*Bonsoir*) は「私はおまえという人間が今、私の目の前にいる」ということを認識したと相手に伝えるのが目的の挨拶である。視線は現在という瞬間に注がれている。これに対し、*Bonne journée.* (*Bonne soirée.*) とは、これから何時間か相手が活動する時間があると推察される場合、その数時間をどうぞ楽しくお過ごしくださいという意味である。視線が将来に向かっていく。

フランス語には「日」を表す *jour* と *journée*、「晩」を表す *soir* と *soirée* のペアだけでなく、「年」を表す *an* と *année*、「朝」を表す *matin* と *matinée* 等のペアがある。それぞれのペアの使い分けを、敢えて感覚的に分かり易い説明をするなら、それぞれのペアの前者は点を表し、ある一定の切り取った時間を意味しているのに対して、後者は線を表し、即ち時間の流れの続いた幅のあ

る時間帯を指すと理解すればよい。そして、各ペアの前者は全て男性名詞であるので、「良い」を表す **bon** の男性形 **bon** が付き、一方各ペアの后者は全て女性名詞であるので **bonne** が付くことになる。

挨拶の言葉を間違えて、やや深刻な事態に陥ることがある。日本のある要人の夫人がとあるフランス語圏の国の迎賓館に泊まった。ご主人の外交的活動のお供でその国にやって来たのである。夫人が晩餐会を終えて自分の部屋に戻った。ご主人の方は別の用事がある、夫人だけが一足先に自分の部屋に引き上げて来たのである。

部屋の入口近くの廊下で、夫人のお世話係としての役目を言いつかったメイド頭のジョゼフィーヌが笑顔で出迎えた。真夜中に近かったので夫人は **Bonne nuit.** と挨拶をした。ところがこの言葉にジョゼフィーヌは戸惑った。というのはこのメイド頭は、何か用事があるのに違いないと思い、控えていただけに、夫人からの **Bonne nuit.** という言葉を聞いて、夫人から「もう用事はないので早く下がるように。自分は早く床につきたい。」と言われたと解釈したからである。「私は本当に何も用事をしなくて良いのだろうか。」と独り言を言いながら、いささか不満そうな顔をして引き上げてしまったというのである。

夫人はかつて日本の大学で、夕方から夜の半ばまでの挨拶の言葉は **Bonsoir.**、夜が更けて深夜に近くなると **Bonne nuit.** と言うと、機械的に教えられていたので、その時は深夜に近い時間帯だったことから迷わず **Bonne nuit.** と言ってしまったのである。勿論、メイド頭のジョゼフィーヌを即刻部屋から追い払おうなどという意図は全くなかった。実際夫人もジョゼフィーヌが余りにさっさと引き上げて行ったのに内心びっくりしたくらいであった。**Bonne nuit.** の正しい用法を知らないことから生じた誠に残念な誤解と言うしかない。

因みに、**nuit**（夜）は女性名詞で、それに対応する男性名詞は無い。つまり上記の **jour** と **journée** のペアのような男性名詞と女性名詞のペアを作ることができないのである。**nuit** に対応する男性名詞が無いということは、時間上の

点を指すことができず、ということは取りも直さず「人と出会った時」という時の流れのある一点を表して挨拶をすることができないことになる。挨拶としては *Bonne nuit*. しかなく、その意味は「この後の幅のある時間を楽しく安らかに過ごしてください」ということ、すなわち「おやすみなさい」ということになるのである。

6. 『星の王子さま』: *apprivoiser*

2001年の12月上旬、私は職場に近いプティサコネの郵便局の中で列に並んで自分の順番を待っていた。日本の家族にクリスマスのプレゼントを送るためである。列の途中に棚が立てかけてあって、そこに郵便局が行っている各種のサービスを紹介するパンフレットが何種類か並んでいた。興味を持った人は持ち帰って良いことになっているようだ。見るとはなしに見ていたら、その中に “*Apprivoisez l’euro, en pieces et en billets*” というタイトルのパンフレットがあった。1部を手にとってパラパラと眺めてみた。2002年1月1日からのヨーロッパの単一通貨「ユーロ」の流通開始に備えて国民を啓蒙する各種の情報が記述されていた。(もっとも、スイスはEUに入っていないので、ユーロは自国では流通しないのだが、何せ大国フランスと隣り合わせているので、全く無関係という訳にはいかないのだろう。)

ところで、私にとってはユーロは取り敢えずどうでも良いのである。このパンフレットを手にとったのは、タイトルの最初の単語 *apprivoisez* に惹かれたからに他ならない。*apprivoiser* とは、今から50年程前、大学に入って第2外国語として初めてフランス語を勉強し始めた頃遭遇した思い出深い単語である。それ以来全く目にすることのなかった懐かしい単語である。

私が大学生の頃フランス語を勉強する学生の多くはサン＝テグジュペリ (Antoine de Saint-Exupéry) の『星の王子さま』(*Le Petit Prince*) を読んでいた。絵がたくさん入っていて子どもの本だなあと思いつつも、私も辞書を引きつつ一生懸命読んだ。なるほどロマンティックな童話であるが、何やら大人

にも当てはまる教訓が一杯隠されているような気がして油断できない本だと思った。この本の後半部分で星の王子さまがひとりぼっちで寂しい狐に会う場面がある。狐は星の王子さまに、「私は寂しくて退屈であるので私のことを *apprivoiser* して欲しい」と頼むのである。王子さまは *apprivoiser* とは一体どういう意味かと狐に聞く。狐は *apprivoiser* とは「何かの関係をつくること (*créer des liens*)」だと答える。そして「あなたは私を *apprivoiser* したら、他に似たような狐がいても私のことだけが気にかかるようになる。本当のことは眼では見えない。心でしか見えない。このことは何かを *apprivoiser* した人だけに分かる真実だ」と言う。*apprivoiser* とは何やらロマンティックでかつ深淵な意味を持つ言葉のようである。もし試験で『星の王子さま』を1つの単語で要約せよという問題が出されたら、私は迷うことなく *apprivoiser* と書いたであろう。そんな重要な言葉であるのだ。敢えて訳語を見つけて書き出すというようなことは畏れ多くてとても出来ない、そもそもそんな気にさえならない、それほど神聖な感じの言葉だった。

そんな言葉であるので、少しも神聖でないプティサコネの郵便局の棚にあるパンフレットのタイトルにその姿を見つけ、戸惑ってしまった。*apprivoisez l'euro* とはどういう意味なのだろう。

まるで禁を破るような後ろめたさを感じながら、恐る恐る *apprivoiser* を仏和辞典で調べてみた。

apprivoiser

1. 飼い慣らす ～ *un animal*
2. (人を) 従順にする、手なずける ～ *un enfant difficile*

とあった。何のことはない。*Apprivoisez l'euro, en pieces et en billets.* とは要するに1月1日からユーロが流通を開始するので、「硬貨と紙幣の双方でユーロを上手く手なずけろ、ユーロに慣れろ」というだけの意味ではないか。

第4節で **public** という語について述べた際に、フランス語はラテン語から繋がる長い歴史を経てきた中で単語の意味が多義化していったと考えられると考察したが、ここでも同様のことが言えるのではないか。辞書には上記の意味しか記載されていないが、**apprivoiser** という語は「飼い慣らす、手なずける」という意味から発して、「関わる」、「馴染む」、「慣れ親しむ」、「仲良くなる」、「絆を結ぶ」というように、コンテキストによって、状況によって、あるいは、使用する人の気持ちによって、関連するさまざまな意味を表すことができ、そのことこそがフランス語の大きな特徴と言えるのではないだろうか。いずれにせよ、**apprivoiser** という語に魅せられて30年。やっと再会できたと思ったら、30年来の夢破れ、以下のように思ったものである。

『星の王子さま』の中で **apprivoiser** という単語が帯びていたロマンティックかつ不思議かつ深淵なオーラのようなものは一体どこへ消えてしまったのだろうか。ユーロを手なずければ「眼」ではなく「心」で1ユーロ硬貨が見えるともいうのだろうか。『星の王子さま』の中の **apprivoiser** には確実に哲学的な人生の生き方にかかわる大切な要素が含まれていた。30年ぶりに再会したと思ったら、こともあろうに世俗の極めつけとも言える貨幣と一緒に同じセンチンスに出てくるなんて一体どういう了見なのだろうか。

私は一瞬頭の中で、過ぎ去った青春を懐かしむシャルル・アズナヴールのシャンソン “Hier encore” が流れ出し、それを聴いているような錯覚に陥った。

注

- 1 本稿は、ジュネーヴ日本倶楽部編集『BONJOUR! れまん』2002年9月号～2003年2月号に連載された記事に大幅な加筆修正を施し再編集したものである。

参考文献

天羽均 他(編)(2001)『クラウン仏和辞典』第5版 三省堂:東京.

Hoad, T. F. (ed.) (1993) *The Concise Oxford Dictionary of English Etymology*.
Oxford University Press: Oxford.

Picoche, Jacqueline (2009) *Dictionnaire d'étymologie du français*.
Dictionnaires Le Robert: Paris.

Some Episodes on a Struggle to Learn the French Language

Toshiyuki Taga

Based on his experience of having lived in Geneva, a city in the French-speaking part of Switzerland, the author introduces some French words whose spellings are identical or very similar to their English counterparts but whose meanings are sometimes totally different as is the case of the French word “avertissement,” which means “warning” and not “advertisement.” Such words or faux amis (false friends) are dangerous and could be the cause of serious misunderstanding.